



TITLE:

亞刺比亞[海]を横りて(渡歐日[記]第六信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

CITATION:

寺田, 貞次. 亞刺比亞[海]を横りて(渡歐日[記]第六信). 地球 1925, 3(2): 289-294

ISSUE DATE:

1925-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182822>

RIGHT:

亞刺比亞海を横りて

(渡歐日記第六信)

寺田 貞次

【廿日】雨、早朝出立と云ふので六時過に起き、食後直に自動車分乗、キャンデー見物をなす、先づキャンデー湖を一週する、千八百二十二年に造られたもので水清く熱帯の老樹生ひ茂り風景絶佳、殊に空氣新鮮な早朝の事さて一層の涼味を覺えた、昨夜觀た佛牙寺が湖畔の一角に在る、錫蘭唯一の佛蹟であるから拜觀する、全部石造で中央に本堂が在り周圍に廻廊がある、右側には經藏が在り此處には各國君主の眞影を收めて居る、吾が明治天皇の御尊影をも拜する事が出来た、左側には佛牙堂が在り、黃銅製兜形の塔を安置して在る、佛牙を藏する處だと言ひ、信者の參詣も多く早朝から若い娘達の寺僧の前に頓首くのを見受けた、參詣には芳香ある草花を供する風習らしく塔前等には無數の花草が散亂して居た、佛牙を藏する場所と申せば假令事實疑ふべきものと考へられ居るにせよ、信者には有り難い處であるに相違がないが、餘りに不潔であるのさ、乞食の多いのには驚かざるを得ない、よく旅行記に乞食が多いので早く逃げ歸た等記して居るのを見るが今も變らぬ蠻風には興をなされた、寺を出で程程たる植物園を觀る、Peradeniya Garden と稱する、三方河に圍まれた平地に設けられ、海拔一千六百呎の高所ではあるが氣溫は年平均華氏の七十六度で、雨量も充分であるので熱帶性植

亞刺比亞海を横りて

物の生育に適する由、椰子 (Palm) 竹 (Bamboo) バンクス (Mn) 木 Pandanus or Screw pine 諸種の寄生植物 (Epiphytes) 例へば蘭 (Orchid) 類 (Fern) 並に高大な樹種等繁茂し美花並に果實は四時絶ゆる事がなく、純熱帯の景觀を味ふ事が出来、自働車で觀覽する爽快である、竹の如き印度特有の壯大なもので殊に眼を引いた、世界最美の植物園と評せらるも過言でない歸途は風景に富む場所を多く通るが昨日は夜になり何も見なかつたので一層趣味を以て眺める、最著しいのは Kaduganawa Pass である、Kaduganawa Rock と稱する巨岩を貫く隧道を出ると道は急に下り坂となり眺望絶佳、遂に錫蘭の連山を眺め、Adam Peak, Bible Rock 等一望の中に入り、眼下には深谷萬丈、然かもテレースの水田美しく開けたる壯觀である、錫蘭島の名産とされる茶樹の栽培も此邊に廣がり紅茶製造場も各所に見受けた、蓋此地方は一帶赤褐色土壌で、濕度雨量充分であり茶樹栽培に利用したのは理に思ふた、折りしも熱帶特有の驟雨襲來、然かも驟雨の好標本とも云ふべき猛威を振うたので觀察はおろか、一時は自働車の運轉すら休止せし程で少し豫定より遅れ晝過コロンボに歸着し、棧橋前に休憩した、晝食には名物だと云ふので、ライスカレーを味ふ、錫蘭米であらう矢張り粘着性に乏しく不味邦人の口には適しなかつた、本島は寶石の名産地殊に Catagay, Rubis 等の産地で寶石商が多い、日本客を歡迎する寶石商に案内されたので同行中には早くも御土産の撰擇に必死の者も少くなかつた、驟雨の襲來尙止まざる爲め博物館始め市内の見物は充分に出來ず歸船した。

二六

三七

キャンデー旅行は自分等は船の都合で一泊する事が出来たがキャンデー迄は汽車の便もあり自動車と同じく約四時間で達するから、早朝着船の場合は日歸りで充分である、費用は約三十圓を要した、コロンボ入港の邦人は重にキャンデーに清遊する事に定て居るが果して夫だけの効果ありやと云ふ問題になる事不評に終るのが多い様である、のみならずキャンデーは日本人の様な御金持旅行家の訪問場所であるとする惡評する者もある、但し行く者の目的にも依るから一概に論ずるわけには参らぬと申して置きたい。

コロンボを去るにのぞんで申したいのはコロンボ港に付てである、コロンボ港は地形上餘り良港とは考へられない、然し此地は錫蘭島の首府であり、本島第一の貿易地であり、殊に東洋及び濠洲よりの旅客並に生産物の集合地である云ふ特種の地位を有して居るので、人爲的に防波堤を完備し今日の利用を全うし得たもので、防波堤は案内記に見る如く規模壯大堅牢に出て居る、夏期には山なす波濤が此の築堤に激して幾十丈の水烟を揚げ壯觀である云ひ、繪葉書等にも之を盡きてコロンボ港の誇として居る程夏季の印度洋は大波であるにも拘はらず港内は波靜で安全な碇泊地となして居る、然し水面積は五百畝で餘り廣くもなく、大船の入港自由ではあるが水深は餘り深くはないものと見え船の運動と共に水面甚しく濁りを呈して居り、岸壁其他の設備は未だ完備して居るさは考へられなかつた。

夕頃には驟雨全く晴れ港外の波も靜かに市街赤屋根を照らす日没の光と相映じて一種の華觀を呈し船の出入も多くなり我が

船と並て碇泊せる巨船 Oceanic 丸は先づ出帆し、日本郵船の歸航船伏見丸之に代つて入港、我が船と近く相並て投錨したので乗客何れも甲板に出で互の健康を祝したが、間もなく我が船も伏見丸を残して愈々印度洋の航海に入つた。

【廿一日】晴、愈々印度洋上の客となる紅海迄は約二千二百哩約五日、スエズ迄一週間を要する、前途遙遠の感がある、印度洋は所謂モンスーン發源地であるから波濤は時季に依つて大差がある冬季は東北モンスーンで風は東北から吹くので支那海方面は強勢波浪も高いが印度洋邊は靜穩で殆ど鏡の様な趣がある、然し夏季に入ると南西モンスーンが此附近から起るので風勢強く波浪從て荒いのを常とする、此の高波は六月頃から初り七、八月頃は最甚しいのである、我が皇太子殿下歐洲より御歸國の際印度洋御通過は丁度八月に當つたので亞丁以後は御召船なるさしもの巨艦も狂瀾激浪に翻弄されたさ御旅行記に見えて居る、今は將に南西モンスーンの發生時季であるから印度洋の波濤如何と密に心配したが、今日は午後大驟雨が一度來襲しただけで波靜かに晝にはコロンボから二百十二哩を來た、然し何分前途遙遠の航海だから何かやられれば退屈する云ふので例に依り運動會をやる事になつた、日本人側では大販商業會議所の阪部二郎氏發起となつて一同に協議があり賛成を得た、一方では或る一部の發意で俳句の募集が出された、課題は釋迦祭である、錫蘭の本場で釋迦祭を觀た一同には趣味を引た、午後には甲板で選手の練習も初まり、船に弱い日比野寛氏も流石に顔を見せた。

【廿二日】晴、案内記には古倫母から三十餘時間でミニコイ島

(Minioic) の燈臺を眺めることある、此島は印度半島の西南に散在する珊瑚質の群島で、北部の Takath 群島と南部の Mediv 群島との間の Eight Degrees Channel に在る珊瑚環島であり、先年我が南洋諸島中の珊瑚島を觀た自分には何となく趣味を感じたのと、一つには歐洲戰役中我が常陸丸が獨艦エムデン及ウルフの毒牙に罹つた遺跡ださ聞たので是非觀て置きたい感じがした、我船は朝の五時頃通過すると云ふので四時半頃甲板に出て見たが、折悪しく船は燈島からだいふ離れて通過したので幽かに燈臺の微光を認め得るに過ぎなかつた、今日も天氣よく午後一度驟雨を見たのみで、海波靜に午前中は例に依り諦て過した、夕には食堂各テーブルから一名づゝの委員を出し運動會委員の撰定に付て協議があつた。

又昨日募集の俳句の互選があつて、左の數句が高點として發表された。

菩提樹の月蔭涼し釋迦祭	神野
釋迦祭長者が家の施行哉	松本
滿月に象も踊るや釋迦祭	福井
石段を象ならび行く釋迦祭	北岡
釋迦祭錫蘭の興亡三千年	郷古
佛祭る燈火清し椰子並樹	星野
釋迦祭る衆生の姿あはれなり	織田(萬)

【廿三日】晴、印度洋に入り三日目である、心配した波も意外に靜かである、晝船は北緯九度四十一分東經六十五度五十五分の處を走り丁度洋の眞中に居るわけである、錫蘭附近迄は時々驟

亞刺比亞海を横りて

雨を見たが西するに従て驟雨は少くなり今日は既に一回の來襲もなく洋上の雲も漸次少くなつた、乗客は相變らずデッキョルフ、園井等思ひ思ひの遊に鬱を散する、夕食後運動會委員撰定があり、結果近藤茂吉、星野辰雄、坂部二郎、米窪滿亮、古瀬安俊諸氏が當選した、昨日の俳句野次連の集合も始まる、互選の結果左の數句が撰出された。

題 夏の月

夕立にはれし船路や夏の月	上村
蒼溟萬里鵬翼涼し夏の月	織田(萬)
甲板のダンス涼しき月夜かな	寺田
蟻おどる黒潮凄し夏の月	市川
古里の子よ寝冷えする夏の月	古瀬
歌もなく句もなき人や夏の月	船長

明日の課題スコールと定まる、俳句もだいふ飽が來た。

【廿四日】晴、今日も渡靜かで空一點の曇りもない、氣溫は漸次高くなり朝から八十五度を示して居り、甲板の水練も益々爽快氣に見える、運動會氣分がだいふ濃厚になり準備の練習が盛に行はれる、ボートデッキの諸曲會場も爲めに占領される騒ぎなつた、今日は英皇御生誕日と云ふので乗客中の英人は祝章を表する爲め夕食の際假裝をして一同を笑はせた、二三日續た俳句もだいふ飽が來たので次回は川柳を募集する事になり船中雜感と云ふ類が出た、夕食後入浴デッキで湯衣のまゝ涼む、上達野雷之助氏同孝氏を始め長田、古瀬氏も來會茶葉談話意外にも就寢時間を忘れた。

【廿五日】晴、今日も空晴れ一點の雲もない、然し風少々強まり船體動揺する、運動會は愈辨判長に岸清吉博士を推し、上遠野富之助氏を司令官、河原田稼吉氏、鈴木文治氏並に織田、星野三枝三博士を審判委員とし、古瀬、星野(辰雄)、近藤、米窪諸氏競技委員となり開催に決した、書には北緯十二度三十九分、東經五十五度廿四分の處を走り前途遙遠の思をなした印度洋も殆ど過ぎ阿弗利加大陸沿岸に近く、午後二時頃にはソコトラ(Socotra)島を左舷に觀る様になつた、風の關係もあり冬季には島の南側を通過するが今は南西季候風の時期であるので北側を通過して居るのである、朝から高かつた波も此島に差しかゝると急に

静まり恰も湖上を行く様になり、之れで心配な印度洋も無事に通過し終る事になつた、今は島影も見え波も静になつたので一同男み立つて甲板に出て眺める、海拔一千五百乃至三千七百呎餘の Round Hill とか、四千六百餘呎の Jebel Higga 等の高峯が恰も我が鋸山の如くに聳え、草一本ない峨々たる褐色の姿は、數日前錫蘭島の綠滴らん許の景色に比し慘憺の感にうたれた、海岸に白く見ゆるは確に沙漠である、余は初見の事であるから一層趣味を以て眺めた、一外人は此島は數十年來降雨がない爲に全く無人である云ひ、船員の或る者は此島には所謂人喰人種が居るので燈臺の建設が出来ない云々と教へてくれた、何れにせよ乾燥地帯であるから生物の生育に適しないのは事實で湿度の如何に自然を養ふ事の甚しきかを察せざる理には行かなかつた、今少し行くと阿弗利加の東端ガルダフィ岬(Gardafui)が見える筈だと聞たが夜に入り遺憾ながら觀る事が出来なかつた、

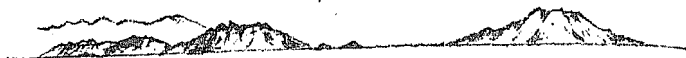
た、夕には募集の川柳披露がある、題が題だけに振たのが多い、上遠野翁等は却々妙流をはいた様に聞いた、例に依り八時半入浴、涼む、上遠野父子、長田、市川、竹本、内藤、森の諸氏來會願であつた。

【廿六日】晴、相次で快晴、乾燥空一點の雲もない、兩岸こそ見えないが波は静かであり運動會には好適である、勞働會議の政府代表さか資本家代表さか、體育協會々長さか將何々博士さか鹿爪らしい連中も船中のみは全くの大童子で我を忘れて各種の競技に熱中する、晝頃美しい海面に眞黒な鯨の跡を觀た、一同競技を忘れて見物する、夜には香取丸船員の演藝會が催される、後部デッキに舞臺を設け香取座の幕を張り、三昧、太鼓の囃子却々に賑かに三曲合奏、喜劇、安來節、手踊など田舎芝居見物の心持がして一興であつた。

【廿七日】晴、快晴一點の雲もない、早朝右舷に島影を認めた、丁度亞丁沖約廿哩の處を通過して居るのである、初めて見るアラビヤ沿岸と思ふだに愉快で刻々の變化し行く景色を注視する海圖に依るさ最初に見えたのは海拔一千七百七十六呎の Aden Peak で其の東端 Ras Madafa へ入ると亞丁港である、其の西には亞丁灣を隔て、再アラビヤの海岸が連續して見える、Asss Fars (700 ft.) Jebel Hisan (3287 ft.) 等で昨夕觀たソコトラ島と同様峨々たる岩山で綠樹等更にない様である、晝頃紅海の入口バヤレンデブ (Babel Mandeb) 海峡を通過する、右にアラビヤ左に阿弗利加の連山を眺め、海峡にはベリカ (Perica) と云ふ小島が横ばつて居る、相變らず無樹で所々沙漠をなして居る、紅



圖望遠島ラトコロ



望遠港丁亞



圖望遠カモ



口入峽海アデナムルベバ

海の口を扼する要地であるから今は英國の要塞地となり、兵舎
タンク等建設され燈臺も高く聳えて居り、軍艦様のものも見え
て居た、島を右舷に眺めて愈船は紅海に入り、急に方向を西北

亞刺比亞海を横りて

に取て進む、暫く兩岸の景色美しく、右はアラビア、左は阿弗
利加の連峯である、アラビアの方は依然岩石質鋸山式の景色で
海岸は一帶沙漠をなして居るが、阿弗利加側は同大陸の地形を
物語る様な極く立派な臺地をなして居る、五時半頃モカ (Mo
ca) 沖を通り、アラビア東端端の山脈地で比較的高峯が其の後
に重疊して見える、海圖に依るに Jebel Nair (1150 ft.) Jebel
Kaderi (976 ft.) 等で毎岸に白色の岩石が長く連り上に燈臺が屹
立して居り、石造の家屋が立派に並で居る、後の連山と海岸と
の間には白色の雲が細長く棚引で居る、コロンが出帆以來暫く
見なかつた驟雨の暗雲を初めて認め、美しい虹を眺める事が出
來た、之は附近の乾燥にも係はらず此邊だけは幾分の雨量のあ
る證據で、此の地がアラビア中唯一の珈琲栽培地である所以を
教ふる感がした、げにモカ附近は酷熱であるが日中は海霧立ち
ふさがつて日光の直射を防ぎ、夜には後方アラビア沙漠より熱
風連山を越して吹き下り氣温の急下を防ぐ、此現象は珈琲成育
に適するのであると申すのは道理であると初めて會得する事が
出來、又アラビアの一角たる此地の比較的住民に富める所以な
も理解する事が出來た、船員からは紅海は航海中最暑い處で航
海に苦痛を與ふる處と感されて居たので、亞丁沖から紅海の入
口にかけて八十八九度に登り稍暑さを感じたから行く先を慮つ
たがモカ沖通航の頃から俄に北風が吹き出して意外の涼氣に
なり、夕食後は涼しき甲板で川柳の披露もあり、湯衣姿で上達
野氏始め松本、森、古瀬、市川、河原田、伊東、三枝諸氏と茶
菓涼を取るも愉快であつた、愈紅海の旅行も餘す處少いので埃

及旅行の募集が出る、揭示に依るゝスエズ着は廿一日早朝で、旅行は同日午前十一時上陸汽車にて午後五時埃及首府カイロに着一泊翌一日午前十一時カイロ發、午後三時ポートサイド歸着との豫定であり、参加者は明日中に申出との事である、蓋ポートサイドに邦人經營の南部商會と云ふのが在り今は同市で相當の地位勢力をもつて居る、此商會が我々の爲めに案内をやつてくれるのであると聞いた、余は早速参加の申込をした。

【廿八日】、涼氣であるとは申すものの流石に寝苦しいので早起が多い、余も早朝起きたが、水泳場には既に近藤、長田氏等の顔が見えて居り甲板には上遠野翁が散歩して居た、地圖では誠に狭い紅海ではあるが今日は陸岸も見えず、無趣味であるから過日來連續の競技など見物する、汽船一艘行ちがふ、俳句の募集に暑しと云ふ題が出たが思つた程暑くないので野次る氣もしなかつた。

地球學團第一回講習會の概況

我學團員の地球學愛好心を向上させ且つは各員の懇親を計るべく舊臘二十三日より開催した第一回講習會は百九名の出席があつて盛會を極めた。朝より夕に至る地球學の基礎となる講話や實習は熱心に聞かれ行はれ、殊に第二日の晚餐會には席上團員の抱負や地球學上の事業が、さめざめなく述べられ一同世の中にはめづらしい會合であることに陶醉した。會は名残り惜まれながら二十五日の講演と文學部陳列館の參觀で終了した。今回の會場は京大理學部生物學教室の清楚な講堂で行はれたので會員一同の満足を得たことは該教室主腦の方の御聲援に預つたこと、感謝して居る次第である。

大正十二年本邦重要港灣入港船舶

(單位登噸噸)

港名	噸數	前年ニ比シ増△減歩舍
神戶港	二〇、八二五、七四一	一割四十一厘
門司港	一五、九六七、九五三	一割〇一厘
橫濱港	一四、二九九、五三四	二割八分〇
大阪港	一三、六〇三、九七二	二割〇五厘
下關港	九、七五二、五五三	八分七厘
若松港	七、一六七、六八七	二分五厘
小樽港	六、二〇〇、七五二	一割七分七厘
長崎港	四、〇四六、五二六	三割七分二厘
名古屋港	三、三六二、六六三	一割九分四厘
函館港	三、〇五七、一五九	四厘
清水港	二、八三三、〇八四	二割八分七厘
高松港	二、五九〇、六七六	二割六分三厘
室蘭港	二、一四一、六五二	三割八分五厘
今治港	一、九一三、一三三	三分七厘
青森港	一、八八六、六五七	三分六厘
境港	一、七四五、八四六	二割八分三厘
四日市港	一、七二八、六〇三	五分九厘
東京港	一、〇五〇、二〇〇	十六割五分五厘